

タイ, アンダマン海 THAI ANDAMAN CRUISE クルーズ

ジンベエザメ爆発！

昨シーズン（2006年11月～2007年5月）のアンダマン海は、ジンベエザメの超当り年。

例年1割弱というクルーズでのジンベエ遭遇率は、

同シーズン5割弱にまで急激にアップした（ediveクルーズデータより）。

「1998年に起こったジンベエブームと酷似した海の状況」が、昨シーズンも起こっていたという。

その状況を検証するとともに、次期シーズンは、どのような表情のアンダマン海を見せてくれるのか、

果たしてジンベエ高遭遇率は継続し続けるのかをWEB-LUEが独断的に予測する？

Photo & Text : **Takaji Ochi**
Special Thanks : **edive**

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配布および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

THAI ANDAMAN CRUISE
Web-lue 2007. Autumn



Information Link
<http://www.edivekhaolak.com/>

関連情報HPへ

ジンベエザメ遭遇率5割の真相

「今シーズン（2006年11月～2007年5月）は、ジンベエ遭遇確率が高いですよ。通常シーズン中1割程度なのに、今年は5割近くにまで上がっているんです」。そんな情報を元に、タイのカオラックに拠点を置く、ediveのクルーズ船に乗船して、アンダマン海を目指した。ここ数年、ediveの協力を得て、私は決まってアンダマン海クルーズには、2航海乗船している。1クルーズだけでは、十分にその海の旬な魅力を伝えきれないと考えているからだ。もちろん、2クルーズ乗船したところで、100%パーフェクトな情報を伝えられるわけではないのだけど。

今回の狙いは、遭遇率のアップしているジンベエザメ。前シーズン（2005年11月～2006年5月）も、

ediveのクルーズに2回乗船して、2度目のクルーズでジンベエザメに遭遇することができた。しかし、実はこれが自分にとって、9度目のタイ訪問で、初ジンベエ遭遇だった。通常の遭遇率が1割程度なら、その数字も決して悪いわけではないはずである。

にもかかわらず、今回、2クルーズ乗船して、2度もとジンベエザメに遭遇したのだ。ジンベエ遭遇率が上がっているという事実を、身を持って体験したわけだ。

身を持って体験したのは僕だけではない。私より少し早い時期に、ダイビング雑誌のロケでこの海を訪れていた、知り合いの水中カメラマン3人がアンダマン海のクルーズに乗船。全員がジンベエザメに遭遇したと聞いていた。

濃霧のかかった海中から、
忽然とジンベエザメは
浮上してきた

2度のクルーズ乗船で、 2度とも ジンベエザメに遭遇



全般的にサイズは小型？

1度目のクルーズでは、メインのリチュエーロックを潜り終え、「もう今クルーズではジンベエは見れないだろう」と半ば諦めかけていた、クルーズ最終日。ツインピークスに潜っていたときのことだ。いつものように、私はこの岩周辺に群れるロウニンアジやカスミアジ、イエローバックフエージュラーなどの群れの撮影に専念していた。ダイビングもほぼ終盤に差し掛かろうというときに、突如激しくタンクを鳴らす音が聞こえてきた。私は、瞬時にその音に反応し、一緒に潜っていたガイドの平川恭に視線を移した。彼はすでにどこにジンベエがいる見せたジンベエザメは、3mあるかないかの超小型だった。「ち、ちゅええ!」。私は吹き出しそうになりながら(多分目は笑っていたに違いない)、そのジンベエザメに

並泳しながら、撮影を開始した。周囲を確認すると、何人かのダイバーが追いかけてきていたものの、その中にガイドの平川の姿は無かった。他のダイバーたちは徐々に離されていき、最後には、アシストで付いていたタイ人ガイドと私だけがジンベエザメと泳いでいる状態になった。

彼は、ジンベエザメの反対側に回り込み、一生懸命こちらに寄せようとしてくれている。通常ならその行為に感謝したいところだが、あまりに小さいジンベエザメの反対側にダイバーが写りこむ形になり、いかに小さいかが一目瞭然。しかし、それも事実。今年のアンダマン海で目撃されているジンベエザメのサイズは、大きくても6~7mと、小さな個体が多いらしい。といってもこれはかなり小さいほうだと思うのだけど、2クルーズ目にリチュエーロックで遭遇した個体も、4mくらいと、小さめだった。

リチュエーロックで遭遇したジンベエザメ。写真で、下の透明度が悪いことが伺われる

10年前の1998年には、大規模なエルニーニョによる、世界的な海水温上昇が問題になり、世界中のサンゴが白化現象を起こして、死滅した。急激な「地球温暖化」を象徴するこの現象は、我々ダイバーにとって忘れることのできないショッキングな出来事だった。この年の平均水温は、地域により、例年より5度も上昇したと記録されている。水温が例年より0.5度上昇すれば、エルニーニョが発生しているとされる。実際、今年も沖縄の八重山諸島やモルジブなどで、サンゴの白化がはじまっているという情報も耳にしている。

しかし、世界中の海水温が全て共通に上昇したわけではなく、ある海域では、逆に水温の低下を招いていたことが確認されていた。その一つがインド洋東海域にあたる、アンダマン海だ。詳しくは調べていないが、エルニーニョが発生すると、この海域では、ダイポールモード現象という海水温が下降する現象が起こることがすでにデータとして発表されている。

エルニーニョとジンベエザメ遭遇率の因果関係

それが、1998年、そして2007年に当たるわけだ。両年に共通して言えることは、大規模なエルニーニョ現象により、この海域ではダイポールモード現象が起こり、海水温が下降。通常は、28度前後の暖かい海のはずが、時には22度にまで下降して、ダイバーを悩ませた。しかし、冷水域となったアンダマン海に、ジンベエザメが頻繁に姿を見せたことも、また両年共通した事実だった。



まるで山の頂を覆いつくす雲海のように、透明度の悪い海水域がダイバーを飲み込もうとしているように見える。



ダイポールモード現象

英語: Indian Ocean Dipole (mode), IOD

インド洋熱帯域において、初夏から晩秋にかけて、東部で海水温が低くなり、西部で海水温が高くなる大気海洋現象。それに伴って起こる風や気候の変化を含み、エルニーニョと同様に世界の気候に大きな影響を与えることが明らかになった。特にアジアあるいはインドの夏のモンスーンに影響を与えることから、その重要性が次第に認識されつつある。ダイポール現象とも呼ばれる。

1999年に山形俊男、サジ・N・ハミドらによって報告された、太平洋のエルニーニョ現象に対応する現象である。ただし海水温の分布様式はエルニーニョ現象とは東西逆である。1961年や1994年の現象のようにエルニーニョ現象とは独立と発生する場合や、エルニーニョ現象を誘発する現象があることがわかってきた。インド洋東部の南東貿易風が異常に強い時に発生する時が多いが、温度躍層が深い場合には発生しにくい。インド洋の海水温変動ではエルニーニョに伴うインド洋全域昇温に次ぐ強いシグナルを持つ。

なんらかの理由でインド洋で南東貿易風が強化されると、東側にあった高温の海水は西側へ移動させられ、また東側では深海からの湧昇や海面から蒸発が盛んになるために海水温が低下する。その結果、インド洋の西側にあるアフリカ大陸東岸では海水温の上昇により蒸発が盛んになり降水量が増加する。逆にインド洋の東側にあるインドネシアでは蒸発が抑えられるので降水量が減少する。このためダイポールモード現象は多雨による洪水、乾燥に伴う山火事といった異常気象を引き起こす原因となりうる。

ジンベエザメ遭遇率5割の真相

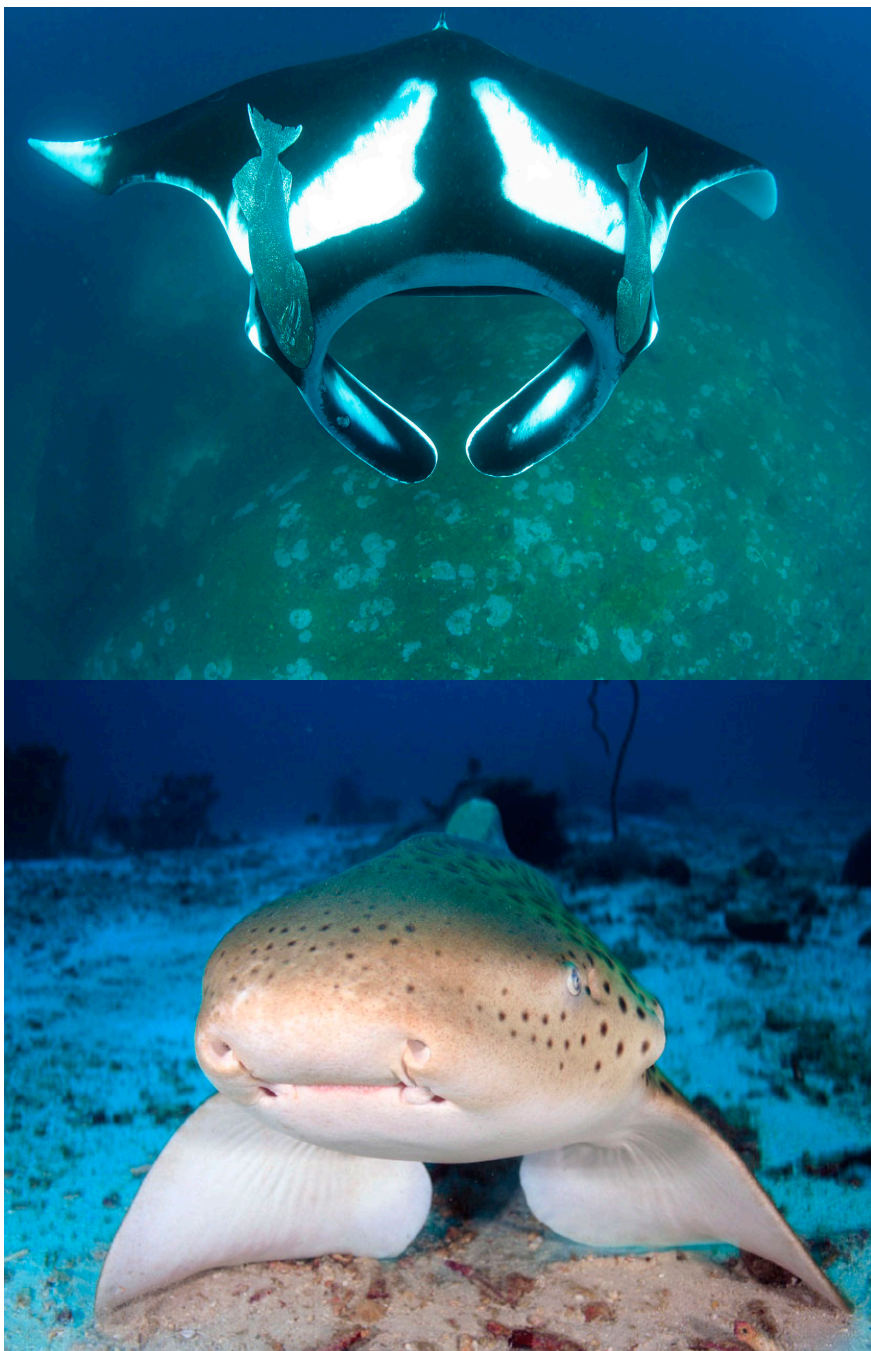
©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

THAI ANDAMAN CRUISE
Web-lue 2007. Autumn



Information Link
<http://www.edivekhaolak.com/>

関連情報HPへ



10年前のデータが、今回それを実証してくれた？

10年前と共通していることは、水温の低下だけでは無かった。例年は青く美しい透明度を誇るシミラン諸島海域（アンダマン海の一部）でさえ、よほど海水が流れ込んできた。ジンベエ遭遇率の高いリチュエロックに至っては、まるで赤潮が発生したかのごとき、最悪の透明度を経験したこともある。これも10年前にも同じような現象が発生していたという。ジンベエザメは、そんな超最悪の透明度の中から、我々の前に突如として姿を現した。

水温の低下、透明度の低下の他にも、通常では見られない生物が目撃されたり、その逆に、通常頻繁に目にしていた生物があまり見られなくなったりという、ガイドからの報告もされている。

例えば、ジンベエだけでなく、マンタの個体数も増えた。例年、珊瑚の根に雲海のように群れていたスカシテンジクダイの数が少なくなった。何故か同じサメでも、レパードシャークの個体数が減った。今までリチュエロックで見られなかったイトヒキアジ、ハーバーストレパリー、ロングフィントレパリーなどのアジが見られるようになった。通常、70m～100mに生息してるインディアンバタフライフィッシュが、水深20m前後で確認された。30m以深の魚、フチドリハナダイが浅場で頻繁に目撃されるようになった。アンダマン海では見たことのなかったカンパチやマツカサウオを目撃した……などなど。

これら全てが、海水温低下によってもたらされたとされる生物層の変化だと考えてよいのではないだろうか。その中に、注目のジンベエザメの個体数増加も含まれているわけだ。



10年前のジンベエザメ爆発を知るガイドの証言

前述したようなデータが得られたのは、このアンダマン海に長年潜り続けているガイドたちの記憶に頼るところが大きい。今回私のガイド役で一緒に潜ったediveの平川恭も、1998年のジンベエ爆発を身をもって体験した一人。

「1998年はもっと透明度が下がって、汚かったっすよ。だけど、ジンベエザメは入れ食い状態。今年は5割弱ぐらいの遭遇率だけど、10年前は7割以上の確率で見れた記憶があります。リチュエロックに行けば、必ずと言ってよいほど、ジンベエザメに会わせることができた。だけど、あまりに透明度悪くて、水温も下がっていたから、ガイドやリピーターのゲストの中には、通常の透明度の高い美しいシミランに戻って欲しいって思っていましたよ。」

今年もエデン（シミラン諸島のソフトコーラルやハードコーラルの美しい、癒し系のポイントで、ジンベエザメに遭遇することはめったにない）でジンベエに遭遇したりと、リチュエロック以外のポイントでの目撃情報も多いけど、個人的には、やっぱりいつもの透明度の高いシミランの海がいいっすね」。そう語った彼は、一緒に潜っているときに、スレートに「こんな海でスマセン」と書いて僕に見せた。

ジンベエザメ遭遇率5割の真相

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

THAI ANDAMAN CRUISE
Web-lue 2007. Autumn

Information Link  関連情報HPへ
<http://www.edivekhaolak.com/>



来シーズンは、どっちだ？ 透明度の高いアンダマン海か、 ジンベエザメ爆発か？

前シーズンのジンベエザメ爆発が、1998年同様に、「エルニーニョ現象、それに起因するダイポールモード現象と関係しているのでは?」という仮説。これは研究者に確認したわけではなく、あくまで私の自説に過ぎない。だから、今回えらそうに語っていることが、100%正しいとは思っていない。

しかし、1998年同様な現象ということであれば、当時は7割近くあったジンベエ遭遇率は、エルニーニョの発生しなかった翌年には、急激に低下した事実（といっても例年の遭遇率に戻ったと考えるべきだと思うのだけど）がある。

もし、来シーズン（2007年11月～2008年5月）、エルニーニョが発生していなければ、ジンベエザメ

遭遇率は通常に戻り、青く美しいシミランの海が戻ってくるはずだ。「どちらがよいか?」と問われれば、私もジンベエザメよりも、美しい癒系の海の方がよい。

この海には、ジンベエだけでなく、色とりどりの美しいソフトコーラルや、元気なハードコーラル、そこに生息する様々なマクロ生物など、ジンベエ以外にも楽しめる様々な海の表情を見ることができるからだ。

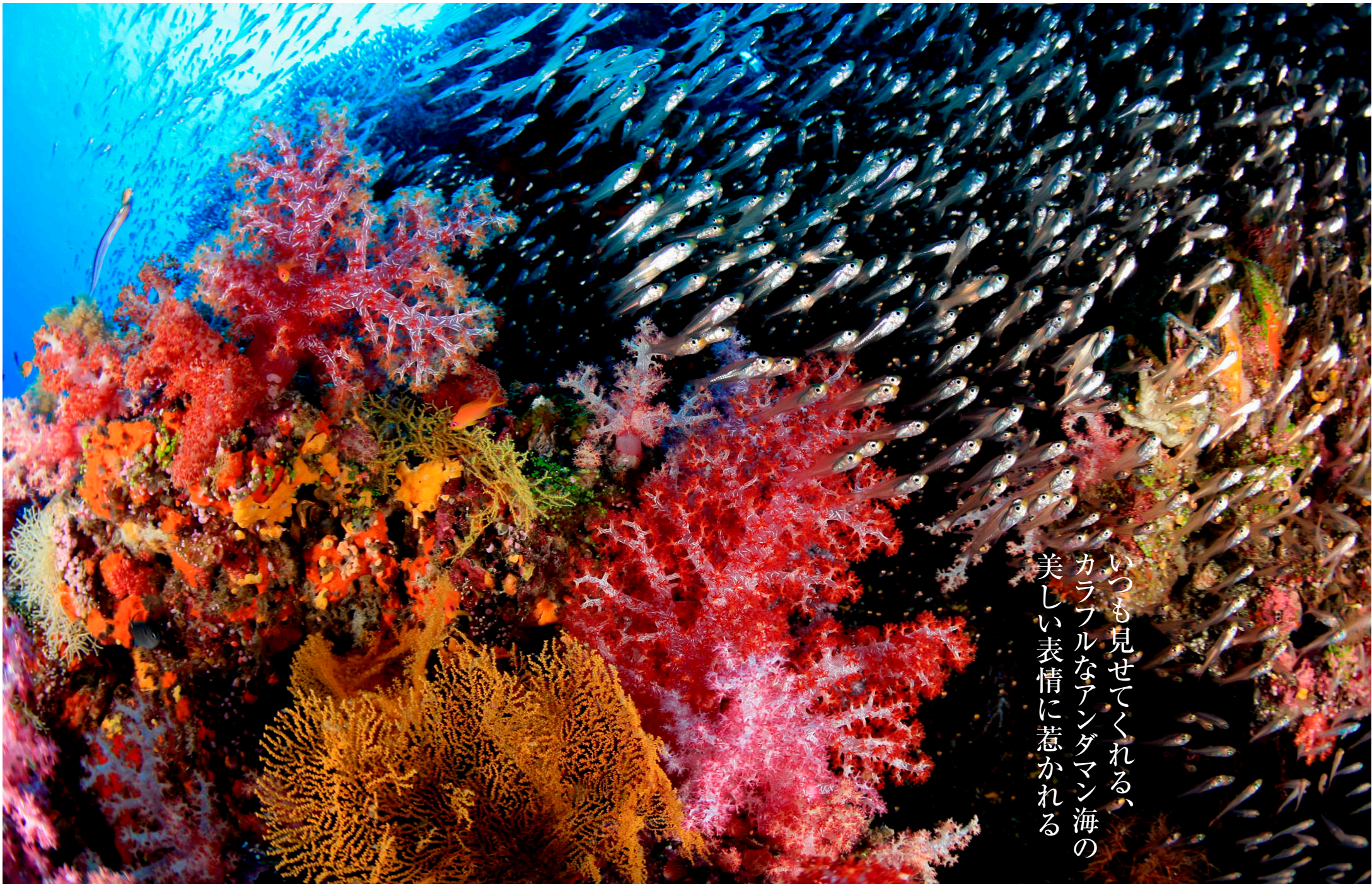
左上、目撃されるマンタの個体数も多かった昨シーズン。ボン島で
左下、リチュエロックに群れるギンガメアジ
右上、クルーズ船から、アナタポイントにエントリーしていくダイバーたち

ジンベエザメ遭遇率5割の真相

©WEB-LUE ウェブマガジンの複製・転載・無断転載を禁じます

THAI ANDAMAN CRUISE
Web-lue 2007. Autumn

Information Link  関連情報HPへ
<http://www.edivekhaolak.com/>



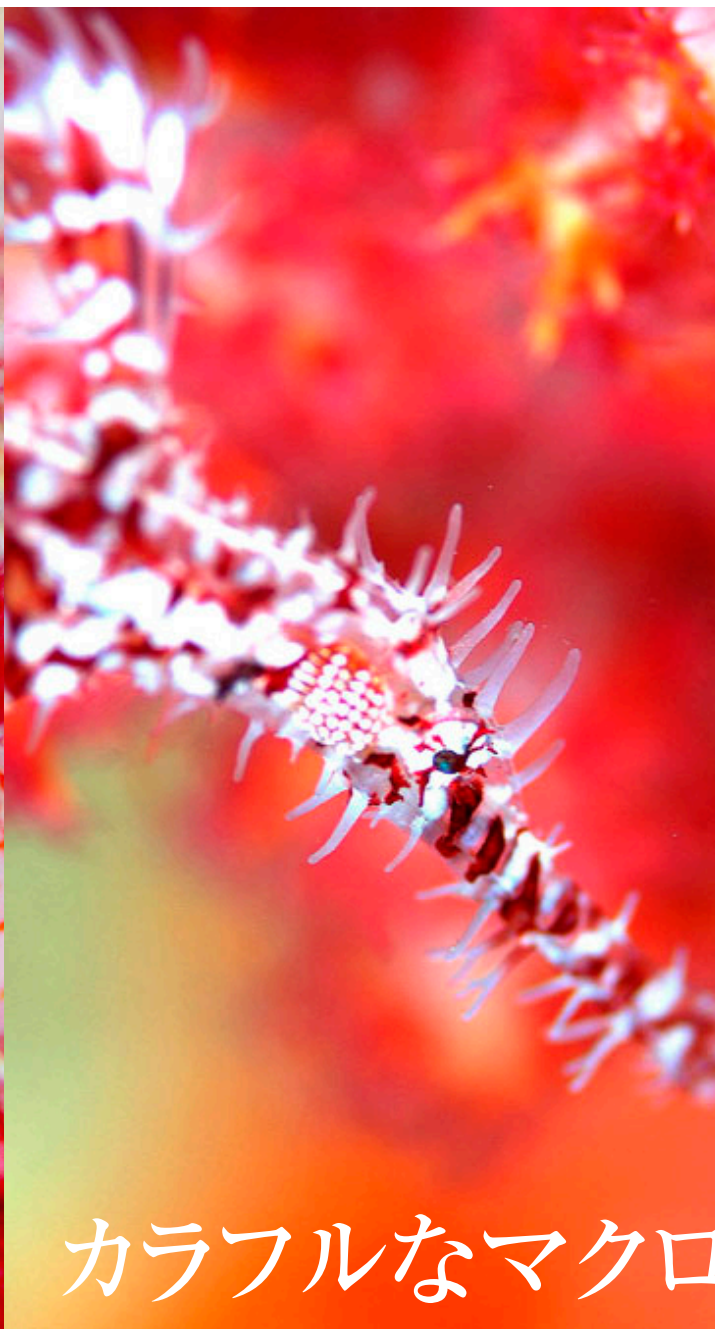
いつも見せてくれる、
カラフルなアンダマン海の
美しい表情に惹かれる

2シーズン前、シミランのアニタで撮影した、美しいソフトコーラルの根。来シーズンはこんな海に出会いたい



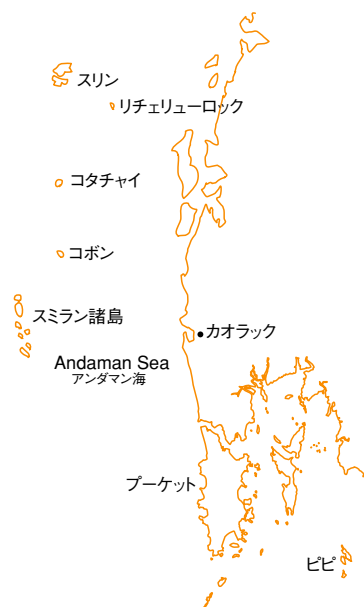
魚たちの色彩豊かな生息環境が、
この海の特徴

赤い岩の穴の中から、かわいらしい顔をのぞかせるハナダイギンボ



カラフルなマクロ撮影を堪能する

THAI ANDAMAN CRUISE
Web-lue 2007. Autumn



アンドマン海を熟知した、 経験豊富なスタッフがそろうedive

今回取材に協力してくれたのは、カオラックに拠点を置く、日本人ダイビングサービスのedive。シミラン諸島、コ・ボン、コ・タチャイ、スリン諸島と、ブーケット、カオラックから出るダイビングクルーズエリアを全て網羅している、タイもっともポイントや生物についての知識が豊富なスタッフがそろう。

10年前のジンベエ爆発も経験しているガイドが3人いて、今回の取材についての彼らの経験が多いに参考になった。

彼らのクルーズでは、乗船中にCカード取得も

できるコースがあり、通常は美しいシミランの海で、ストレス無く講習が受けられる。今回の取材でも、一人の女性が講習を受けていたのだが、講習中に、マンタやジンベエザメに遭遇してしまうという、超ラッキーな経験をしていた。

若くて元気なガイドを随時募集中。興味のある方は、メールにてお問い合わせください。

取材協力 **edive** <http://www.edivekhaolak.com/>

THAI ANDAMAN CRUISE
Web-lue 2007. Autumn

Information Link <http://www.edivekhaolak.com/> 関連情報HPへ